http://www.edu.pref.kagoshima.jp/　（通巻第１８２７号）

指導資料

鹿児島県総合教育センター

特別支援教育第177号

－幼稚園，小・中・高等・特別支援学校対象－

平成26年10月発行

幼児児童生徒の気になる行動に対する指導・支援
－応用行動分析の視点から－

授業中の離席，交友関係でのトラブルなど，気になる行動のある幼児児童生徒に対する理解や十分な対応がなされないことがある。また，注意や叱責といった周囲の対応により，自信の喪失や学習意欲の低下などを引き起こさせることや不適応が継続するなど，深刻化するケースがあり，適切な対応が求められている。

そこで，本稿では，応用行動分析における機能分析の方法を中心に，幼児児童生徒の気になる行動の捉え方やアセスメントに基づいた指導・支援の在り方について述べる。

１　応用行動分析とは

応用行動分析（ＡＢＡ：Applied Behavior Analysis）とは，行動の起こっている状況を観察し，行動の背景を確かめながら，気になる行動に対処するとともに，新たな望ましい行動を教えていく方法である。行動とその前後の状況とを合わせて考えることで，その行動を引き起こす要因が指導者にとって明らかになり，指導・支援の方策を見付けやすくする効果がある。

(1)　行動が続く理由

行動は，その後の結果によって強められたり（強化），弱められたり（弱化）する（**図１**）。また，結果によって，その行動が長期にわたり，続くこともある。

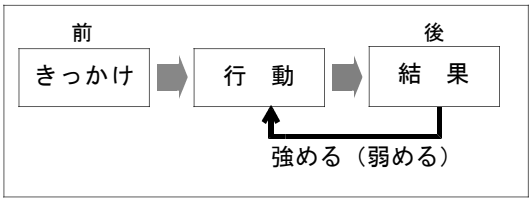

図１　行動とその前後の関係

行動を捉える際には，どのようなきっかけや条件でその行動が生じ，その結果どのような環境上の変化が生じたかを把握することが重要である。

(2)　行動への対応例

行動を強めたり，弱めたりする例として，**表１**のようなことが挙げられる。

表１　行動の結果の例

	強　化	弱　化
正	・　褒められる。 ・　注目される。 ・　好きな物が手に入る。	・　注意を受ける。 ・　ペナルティを与えられる。 ・　痛みを伴う体験がある。
負	・　痛みがなくなる。 ・　嫌なことから逃れられる。	・　好きなことができなくなる。 ・　活動参加を制限される。

※　正：行動の対象者が何かを得ること，負：行動の対象者から何かが取り除かれること

また，**表２**は，気になる行動の具体例とその背景を示したものである。気になる行動の理解においては，起きている行動だけにとらわれるのではなく，行動の

結果（**表１**）やその背景（**表２**）に着目することが指導・支援の手掛かりとなる。

表２　気になる行動の具体例と背景

具体例	行動の背景
授業中の教師の発問に対して，分からなくても「はい，はい」と毎回挙手をする。	教師や友達など周囲から注目を得るための方法として行われている。
苦手な計算問題が出されると，離席したり，教室を飛び出したりする。	ある特定の課題，活動，個人から回避するために行われている。
廊下を水浸しにして，教師に注意を受けるような不適切な行動をとる。	物の要求や人の関わり，活動への参加など，何かを得るために行われている。
コマーシャルのまねや独り言の連呼など，自分が好むことを常に行い喜ぶ。	感覚的なフィードバックを得る方法として行われている。
歯痛や腹痛などを感じて，急に怒り出す。	睡眠不足，体調不良，痛みを感じているということを伝達している。
２校時の水泳の学習が他の授業に変更と知り，パニックになる。	急な予定の変更，多くの説明や指示などで葛藤したり，混乱したりしている。

２　機能分析を活用した行動のアセスメント

行動のアセスメントについては，日頃の行動観察が重要である。ここでは，機能分析を活用したアセスメントの仕方について紹介する。

(1)　機能分析（ＡＢＣ分析）とは

機能分析とは，幼児児童生徒の行動がどのような機能をもっているかということを分析する方法である。行動と要因との関係を客観的に分析していくことで，行動面の問題に対する指導・支援の手掛かりが得られる。

(2)　機能分析の具体的な方法

まず，気になる行動が生じる場面を直接観察したり，関係者から聞き取りを行ったりして，得られた情報を整理する。その際，一日の日課や時間帯で気になる行動が多く生じる場面を中心に，**表３**に示すような表を用いて気になる行動の前後の記録を数回から数日間とる。

表３　小３児童の行動記録様式例

時間・活動	きっかけ	行　動	結　果
朝の会	先生の話	離席	注意される。
国語	本文の説明	離席	席に座るよう注意される。
給食	牛乳を勧める。	離席	座席に連れ戻される。再度，牛乳を勧められる。
帰りの会	先生の話	離席	注意される。

次に，得られた事実から，対象となる行動が生じる前（きっかけや状況）とその後（結果）について，共通点や傾向を整理しながら要因を分析する。

数回の記録から，行動とその前後の関係を**図２**のように整理し，共有化することで，気になる行動やその背景について，関係者間で共通理解が図りやすくなる。

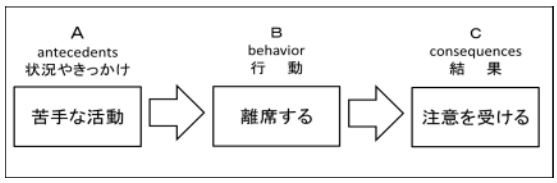

図２　行動理解の枠組み（ＡＢＣ分析）

表３に見られる「離席」行動がある小３児童の場合，話を聞くことが困難であり，話されている内容が分かりづらく，集中が続かないことが推測される。つまり，教師の長い話や多くの説明が，「離席」を引き起こすきっかけと考えられる。この行動の背景は，苦手なことやつまらない状況から逃れたいという「逃避」の機能が考えられる。

３　望ましい行動を増やすために

(1)　積極的行動支援とは

行動面への指導・支援において，積極的行動支援（ＰＢＳ:Positive Behavior Support）という考え方に基づく取組が広まりつつある。これは，気になる行動をなくす（減らす）ことのみを目指すものではなく，望ましい行動を形成したり，代わりとなる行動を形成したりすることで，幼児児童生徒の生活の質を高めることを目指す考え方である。

図３は，幼稚園に在籍する園児が，集団活動の場面で「立ち歩く」という行動に対する望ましい行動の形成を目指した指導・支援の例である。

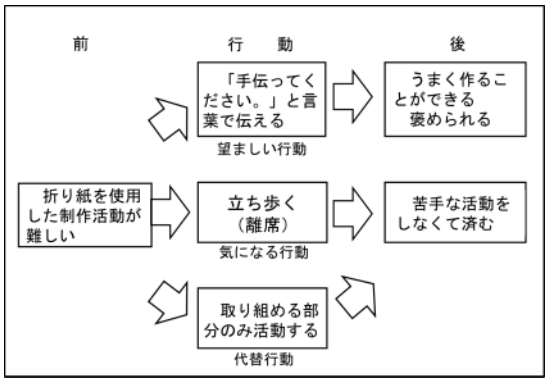

図３　望ましい行動形成のための分析例

活動中の園児の「立ち歩く」行動について，その前後の関係を見てみる。この園児にとって活動が難しいという場合に「立ち歩く」行動が起きていることが分かる。また，「立ち歩く」行動の後は難しい活動をしなくて済んでいる。このことが，「立ち歩く」行動を更に強めている（強化）ということが考えられる。

そこで，**図３**では，望ましい行動として，要求や意思を「手伝ってください」と言葉で伝えることを目指し，その行動が見られた場合は褒めたり，要求を実現したりすることが大切である。自分の思いが相手に伝わったという実感が望ましい行動を増やしていくことにつながる。

一方，言葉で伝えることが困難な場合は，代替の行動として，「取り組める部分のみ活動する」などを設定し，園児が活動に抵抗を示さず着実に取り組めるような手立ても考えたい。

なお，制作活動の困難さが園児の「離席」を引き起こすきっかけとなっているため，分かりやすく，興味・関心が高まる活動を設定することも大切である。

(2)　肯定的な目標設定の考え方

幼児児童生徒の目標については肯定的な目標設定を行うことが大切である。例えば，離席の多い場合，「離席をしない。」とするのではなく，「５分間好きなパズルをする。」とすることなどが望ましい。着席そのものを目標とするのではなく，学習活動に参加できることが重要である。また，肯定的な目標を設定することで，望ましい行動に取り組んでいるという本人の行動自体も肯定的な評価につながる。

(3)　望ましい行動の定着のために

幼児児童生徒が，望ましい行動を確実に習得したと言えるのは，場所や人が変わったり，時間が経過したりしても習得した行動が続けられている場合である。そのためには，幼稚園や学校において，教師間の連携に基づく行動の理解や一貫した対応が重要である。

４　実践例

授業中に教科書や筆記用具を投げる通常の学級に在籍する中学生への機能分析を通したアセスメントと指導例について，次に示す。

(1)　対象者（生徒Ａ）
・　中学校第１学年　通常の学級　男子

(2)　実態
・　日頃は穏やかで口数は少ない。こだわりが強く，一度決めたことの変更が難しい面がある。
・　特定の友達が数人いるが，休み時間などは一人で過ごすことが多い。
・　急に感情的になり，友達へ暴言を吐いたり，授業中に筆記用具や教科書を床に投げたりすることがある。

(3)　対象となる気になる行動
・　授業中に筆記用具や教科書などを投げる。

(4)　機能分析

ア　情報収集

「物を投げる」行動が生じたときの前後の状況を担任や特別支援教育コーディネーターや各教科担当者で記録した。職員室にファイルを置くことで，随時生徒Ａの記録が蓄積された。

イ　行動の要因分析

「物を投げる」行動の背景には，自分の意に沿わないことをしないでほしい「要求」の機能や苦手な課題から逃れたい「逃避」の機能が推定された。英語の時間に生じやすいことや，難しい課題を取り組むよう教師に促されたことがきっかけとなっていることも分かった。そこで，意思伝達力の向上と感情のコントロールの両面から，望ましい行動や代替行動を身に付けることを目指し，「物を投げる」行動の軽減を図った。

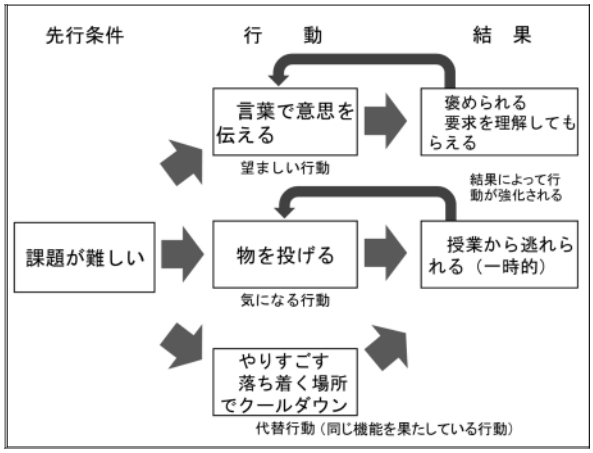

図４　望ましい行動や代替行動の形成の検討例

(5)　機能分析による個人目標設定と具体的な指導・支援

ア　減らしたい行動に対しての前後の対応策（環境面の調整）

行動の前への対応策	○　苦手な課題に関しては，生徒Ａと確認し，課題の難易度や量を調整する。
行動の後への対応策	○　頑張ったところや自力で解けた課題については，賞賛したり，「できている。」ということを伝えて自己有能感を高めたりする。

イ　増やしたい行動の形成に対する指導方針（個人への指導・支援）

	具体的な目標	指導・支援方法	生徒Ａの様子
望ましい行動	○　課題解決が困難な場面において「分かりません。」，「やり方を教えてください。」などと言い回しを覚えて，言葉で教師に伝えることができる。	○　ソーシャルスキルトレーニングにおいて，意思や要求を伝達するスキルや感情をコントロールするスキルを高める。 ○　昼休みや放課後などを利用して指導を行う。	○　分からない課題に対しては，自分からさりげなく手を挙げて教師を呼び，「分かりません，教えてください。」と伝えるようになってきた。 ○　授業場面で急に感情的になること，教科書や筆記用具などを床に投げる行動は激減し，落ち着いて授業に参加できるようになってきた。 ○　友達への暴言が減った。
代替行動	○　不快を感じて感情的になりそうな場面では，深呼吸をしたり，落ち着く場所へ移動したりして，クールダウンを図ることができる。		

幼児児童生徒の様々な気になる行動の背景を教師が丁寧に分析し，望ましい行動を増やすことで，幼児児童生徒は自信をもって学習に取り組んだり，適切な行動を学んだりすることができる。各学校等においては，気になる行動に対して，より積極的な行動支援を推進することが望まれる。

－参考文献－

○　小林重雄監修『応用行動分析学入門』1997年，学苑社

○　メリーアン・デムチャック，カレン・Ｗ・ボサート著『問題行動のアセスメント』2004年，学苑社

○　藤原義博・平澤紀子編著『教師のための気になる・困った行動から読み解く子ども支援ガイド』2011年，学苑社

（特別支援教育研修課）